

京まち工房



F A L L
情報交流誌

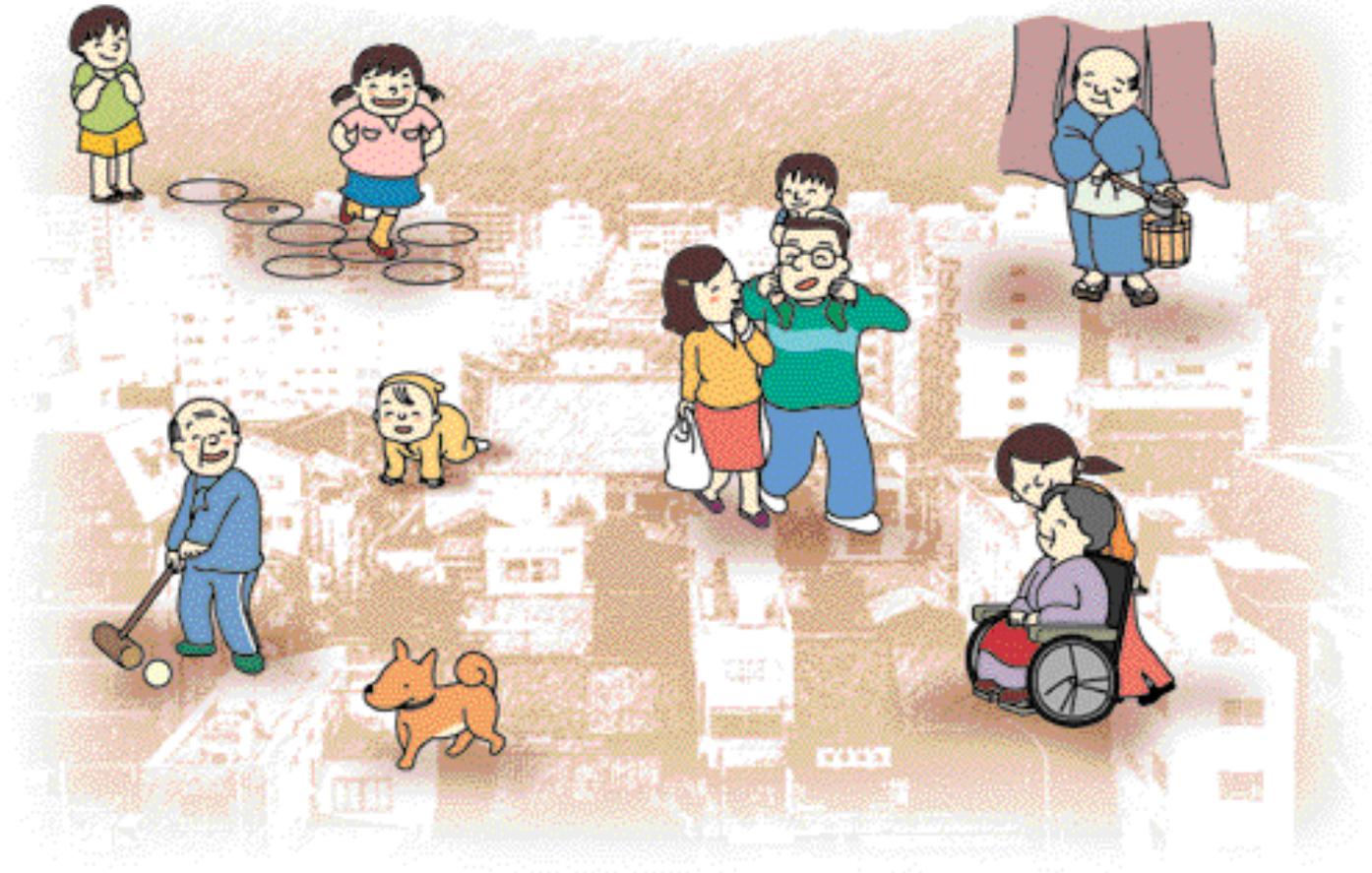
no.

8

(財)京都市景観・まちづくりセンター ニュースレター

パートナーシップで進めるまちづくり

誇りを持ち、安心して生き生きと暮らす まちづくりに向けて



京都には多くの方々ที่誇りにしている資源が豊富にあり、これは全国の他の地域にはない素晴らしいまちの宝です。地方分権という大きな時代の流れの中、そんなまちの資源を生かし、個性豊かで活力に満ちた地域社会を住民自らの手で実現していこうといった動きが活発化しています。これからの地域まちづくりにおいては住民、企業、行政の三者が役割を分担し、連携をしながら、地域独自のまちづくりを進めるための仕組みづくりが、一層求められます。

センターが今年3月から5月にかけて上京区を対象に実施した地域まちづくりセミナーでは、誇りを持ち、安心して生き生きと暮らすまちづくりに向けて、地域の課題を解決するため、地域と

して何をすればいいか、そのプロセスを考えてきました(4ページに関連記事)。まちづくりの課題は多岐にわたり、それぞれの地域によってもその様相は異なりますが、地域住民の方々ที่地域外の多くの人々と豊かに交流し、これまでの地域の良さを引き継ぎながら新たな良さを築いていくことは、重要な課題の一つとなっています。今回のセミナーでも、様々な立場の人が情報を共有し、合意形成を図ることの重要性が再確認されました。

センターでは今後も、地域の多くの方々の参加のもとに、地域の価値を共有し、その延長線上にある地域の将来像の実現に向けて地域外の人と連携を図りながら活動を進めていく仕組みづくりを目指して、地域まちづくりセミナーを積極的に開催していきます。

あなたのまちづくり拝見

フレッシュ生祥委員会

～お祭りをきっかけに人と人とのつながりをつくる～

住民主体のまちづくりを様々な視点から紹介するコーナー。今回は、京の台所といわれる錦小路や寺町商店街を含む生祥学区のまちづくりです。体育振興会、少年補導委員会、消防団など様々な団体の協力のもとに、自治連合会の組織として設置されたフレッシュ生祥委員会が取り組む人の輪を広げる地域活動を紹介します。

生祥学区の特徴

生祥学区は、概ね北は三条通から南は四条通、東は寺町通から西は富小路通に囲まれた南北に細長い地域で、豊臣秀吉による都市改造後の寺院街への参拝や東海道を往来する人々のための旅館、商店が軒を並べる商人と職人、文化人のまちとして発展してきました。

最近では人口減少や高齢化など中心市街地特有の問題はありますが、こうした歴史を現代の町の営みに色濃く残す賑わいのある地域です。

フレッシュ生祥委員会とは？

近くに住んでいるのによく知らない、道で出会っても挨拶もしない、小学校もなくなり、地域としての人のつながりが弱まっていく、そんな状況の打開を望む気持ちが原動力となりました。

学区民とのふれあいを目的とする少年補導委員会、体育振興会などの各種団体の行事も個々に取り組まれ、運営する人手の不足や参加する学区民の減少などの問題を抱えていました。けれども、各種団体の役員間のつながりが濃かったことや、自治連合会の対応が柔軟であったことなどが、フレッシュ生祥委員会の設置を可能にしました。

この委員会の特徴の一つとして役員構成のユニークさがあります。自治連合会をはじめ体育振興会、少年補導委員会、消防団、祥婦会、自主防災会、祥寿会、交通安全協議会、祭賛会、民生児童委員会、遺族会、公園愛護協会、保健協議会、錦青年会、元育友会などの役員が名を連ね、さしづめ地域活動のドリームチームの様相を呈しています。さらに、若い人の代表として二十歳の生祥小学校卒業生をもメンバーに加えている点も特筆したい点です。

さらに、各種団体の年間スケジュールと取組内容を掲示板で共有することにより、無理のないスケジュールと活動内容の調整、協力体制を強化することができました。

幅広い参加で予想以上に盛り上がった盆踊り

フレッシュ生祥委員会の最初の取組は昨年8月に元生祥小学校の校庭で行った盆踊りでした。グラウンド用の照明設備はあえて使用せず、裸電球と提灯により作り出された暖かく、懐かしい光に包まれた空間に、予想を大きく上回る約600人が集まりました。多くの団体の参加により、高齢者から若者、子供に至るまで幅広い年齢層の人々を集めることができました。また、それぞれの団体が責任を持って何らかの取組を行ったことが積極的な参加につながりました。

地域の女性の集まりである祥婦会は盆踊りの練習会を何度も開き、高齢者の集まりである祥寿会の方々も積極的に参加しました。当日の元気一杯のその勇姿は、若い人が目を丸くするほどでした。若者も負けてはいません。二十代の人に、光るプレスレットの販売をお願いしたところ、工夫をこらした看板を一生懸命に作り、当日の賑わいづくりに大いに貢献しました。



懐かしい光に包まれた盆踊り

さらに人の輪が広がる今年の生祥夏まつり

今年の盆踊りは8月29日に開催されましたが、生祥幼稚園の参加も得ることができ、新たなプログラムとしてマジックショーが取り込まれるなど、参加者の層がさらに拡大しました。



多くの人で賑わう出店

また、柳池、立誠学区から盆踊りの櫓の借入れの申し入れや、櫓の組み方、盆踊りの見学などを通じて、人の輪は周辺地域にも広がろうとしています。

フレッシュ生祥委員会の明日

知らないと思っていた人から挨拶があるなど、生祥学区の中の人のつながりは広がってきているようです。

幅広い参加の場の提供のため、クラシックのコンサートを開催する計画があり、現在、地域活動に協力してくれるような演奏家を探索中です。陶芸教室を開催する予定もあります。

これからも、子供たちの思い出づくり、お年寄りの底力の発揮の場、お父さん、お母さん、若い人たちの活躍の場として、自らも楽しみながら人のつながりをさらに深めていけるような取組が繰り返されようとしています。

フレッシュ生祥委員会委員長 村山秀紀さん

幼稚園、小学校の育友会活動から体育振興会の役員を通じて感じていた地域活動への思いと、根っからのお祭り好きがこうじて、言い出しっぺとして気が付けば、ここにいたという感じです。とにかく楽しみながらやっています。

学校がなくなり地域の核がなくなる中で、地域の人のつながりを何とかしたい気持ちが、盆踊りの形で実現できました。

今後はもっと様々な取組を行うとともに、マンションの人や若者にもっと積極的に呼び掛け、参加者の輪を広げていきたいと思っています。

生祥学区自治連合会会長 山田清二郎さん

自治連合会の各団体が行う地域活動は、今まで体育振興会や少年補導委員会や消防団などの各団体がその団体の目的に沿って、個別に行ってききましたが、フレッシュ生祥委員会により、そういった団体が力を合わせ取組を行うことができました。

今後共、幅広く学区民のあらゆる年代の方々要望を様々な角度から汲み上げる取組を、そのプロセスも通じてできるだけ多くの皆さんの参加と協力を得ながら手づくりで行うことにより、人と人の輪をつなげ広げていく、そんな活動が展開されていくことを期待しています。

お知恵拝借～

古いよさを生かした新しい活気のあるまち
 “ OLD NEW TOWN ”
 夢京橋キャッスルロード(彦根市本町)

今回は、道路を拡幅する公共事業をきっかけに、住民主導の景観形成のまちづくりが進められている彦根市本町の夢京橋キャッスルロードの取組について、本町まちなみづくり委員会委員長の奥野文雄さんにお話を伺いました。



幕末の大老・井伊直弼の居城であった国宝彦根城の城下町で、町割りが行われた時に最初にできたまち・本町。ここに白壁、黒格子、いぶし瓦の江戸時代を思わせる町家の町並みが復活したのが平成7年のことでした。幅 18m、長さ 350mの道路に約 40軒の商店などが建ち並び、連日観光客らで賑わっています。

まちづくりの経緯

交通機能を充実させるため、道幅を6mから18mに拡幅する道路事業の計画が持ち上がったのは昭和60年。間口が狭く、奥行きのある城下町特有の町割りだったため、転居する必要はなかったものの、全面建替えに迫られました。その時、このまちの歴史性に着目し、「城下町の景観を再生してはどうか」という持ち掛けが行政からあったのが、本町地区のまちづくりの始まりです。

行政主導から住民主導のまちづくりへ

住民と行政の間で様々なやりとりがありましたが、奥野さんの提案で市が主導ではなく、住民が自ら計画を策定できるよう地権者全員で組織する「本町まちなみづくり委員会」がつけられました。行政主導から住民主導のまちづくりへと移行していったのもこの取組の特徴の一つです。委員会設置後、時間を気にせず、自由に話し合える場所と

して現地にまちなみ相談室を開設。また、委員会に出席できなかった人のために、進展状況や今後の計画等を載せた「まちなみづくり通信」を月に3回程発行することで、常に情報を共有しました。また、先進事例の見学会等も行いました。「これらのことは、まちづくりにおいて大切なことだと感じたことの一つです。その他にも、これまで活動してきて、地域の人がりーダーを選ぶことや、家庭における決定権や発言権の強い女性の意見も取り入れることの大切さも感じました。どれも欠けても、うまくいかなかったと思います」と奥野さん。

こういった活動の結果、昭和63年に建築物の制限に関する条例が公布され、それを基に、住民主導のまちづくりの取組が今日まで続いています。

成功の要因はTPOと行政、専門家とのパートナーシップ

時期がよく、本町という場所もよく、住民側に家屋の老朽化という誘因があったという、いわゆる TPO、そして住民、行政、専門家の三者が一体となって取り組んだことが成功の要因でした。「每晚遅くまで三者の話し合いを持ち、日付が変わることもしばしばありました。

今後も、商店街を中心とする活気のあるまちを目指す攻めの姿勢と、防災、福祉等いろいろな意味での環境を保存していく守りの姿勢を大切に、三者のパートナーシップで取り組んでいきたいと考えています。」



コンサルタントの一人として関わった諸川美那さん
 (嵯峨美術短期大学講師、一級建築士)

100%の合意を目指して、じっくりと時間をかけて取り組んだことが良かったと思います。その中で私たちコンサルタントも、考えを押し付けるのではなく、住民の方々の意見を聞くという姿勢を大切にすることで信頼を得られたのだと思います。まちをつくっていくことは、決して建築の専門家だけの仕事ではなく、様々な分野の人が一緒に取り組んでいくことが大切ではないでしょうか。

参加しました！

絵本に見るまちづくり幻燈会

～こんなまちに住みたいな～

長岡京市まちづくり市民懇談会



平成9年、「まちづくりの活動や提言を市民の自主的な運営で行ってください」という市役所の呼びかけに集まった『長岡京市まちづくり懇談会』。「長岡京だいすき」を合い言葉に、まちづくりネットワークの中心になろう」と、

月1回の全体会議や勉強会、ワークショップ、講演会、情報誌の発行など、多彩な活動を行う市民グループです。今回は、まちづくり幻燈会で全国行脚する風の人、延藤安弘氏(千葉大学教授)を講師に招いて6月に行われた、同懇談会主催の講演会の模様を報告します。

「豊かなまちってどういうまちなんだろう？しあわせに暮らすってどういうことなんだろう？生きていくために本当に必要なものは何だろう？絵本を手がかりに、あなたもいっしょに考えてみませんか？」映し

出される幻燈に合わせて延藤氏が語りかけます。幻燈の中身はいくつかの絵本と、絵本のような各地のまちづくりの風景。幻燈に映し出された7つの物語から、それぞれエッセンスが絞り出されていきます。

「しあわせってわかちあうこと」。絵本の中のスヌーピーの言葉に、「これは生活者主体のまちづくりのキーワード」と延藤氏。続いて、時代を経てまちが変貌を遂げる姿を描いた「変わりゆく風景」という絵本では、「開発至上主義の時代から、市民主体のまちづくりの時代への呼び掛けがなされている」と語ります。高知県赤岡町で開催される「冬の夏祭り」の風景では、「生活者の知恵を寄せ合い、老若男女、混ざり合いを楽しみ合うコミュニティを育むという発想がみなぎっている。京都市内のコーポラティブ住宅「ユーコート」の取組も紹介されました。現在、入居者の第2世代が若者グループを結成して、活動を行っています。「子供の目線や、お年寄りを大事にする豊かな暮らしを求めていくソフトから始まるまちづくりというのは、作法・方法を間違えなければどこでも誰にでもできること」。これらそれぞれの物語に共通して、「生活者の視点のまちづくり・世代を越えた人と人との関係づくり」ということがベースにあるように思います。

この後、参加者からの質問・感想が沸き起こり、会場のユーコート住人の方が直接質問に答えるなど、ユニークなやりとりがなされました。

最後に延藤氏は「市民のつぶやきを発信できる状況づくり」「行政が市民のつぶやきの聞き手になる」「完成品をつくりこみすぎない」「楽しさを旨とする」「互いに相手に寛大であること」というキーワードを残しましたが、これらは全国共通、京都にも通ずる、「まちづくりのエッセンス」ではないでしょうか。

地域まちづくりセミナー

地域まちづくりの契機になることを目的に、上京区を対象に4回シリーズで開催した地域まちづくりセミナーが、5月29日をもって最終回を迎えました。ここでは、京町家、マンション、袋路と各テーマごとに、「誇りを持ち、安心して生き生きと暮らすまちづくり」に向けて、課題解決のプロセスを参加者全員で考え、とりまとめた「いきいき定住物語」の発表と、意見交換を行いました。

第1部 「いきいき定住物語」の発表



発表は、桓武天皇が登場するチームや、劇風に発表するチームなど、短期間であったにもかかわらず、様々な工夫がなされ、会場は大いに盛り上がりました。

「いきいき定住物語」の内容はセンターのホームページでご覧いただけます。
(<http://web.kyoto-inet.or.jp/org/kyoto-ws/>)

第2部 意見交換

物語の発表を受けて、このセミナーにアドバイザーとして関わっていただいた学識経験者の皆さんから次のような講評がありました。

「まちづくりは、人の力を結集してできるもの。この物語にも出ていましたが、多くの人の様々な知恵を集めるには、『対話』や『やりとり』が非常に大切です。知恵を集め、課題解決の方法を考えるにも『対話』や『やりとり』を続けていくことが非常に大切だと思います」(京都府立大学助教授 宗田好史氏)

「ここはこういうまちだから、関心のある人は入ってきてください、こういうまちに合わない人は入っても困るだけです、というように、地域からきちんと情報が発信されていれば、もう少しいろんな事業の仕組みが変わってくると思います」(京都大学助教授 高田光雄氏)

「この物語の中にもありましたが、損をしてまで良いことをしようとは思わないけれど、損をしない限りにおいてはやっぱり喜ばれることのほうがいいという気持ちを、誰しも持っているような気がします。



発表の一場面。手作りの帽子とひげで、役になりきっての名演技。

その善意の気持ちを信じないといけないし、その気持ちを盾にとつていけないといけないという気がしています」(立命館大学教授 乾亨氏)

引き続き、上京区各学区の住民福祉協議会の会長をはじめ、会場の方々からも「これからのまちづくりに必要なのは、人と人が互いに理解し合うことではないかと感じた」「この物語には虚構であるが故に本音が言えるというおもしろさがあったが、実際も虚構で動いていることがある。それぞれが本音を少し隠して、害のない嘘を言いながら8割の本音を言う、そのほうがかえってうまくいくように思う」など、「いきいき定住物語」と今後のまちづくりとの関係について、広く意見交換を行いました。

最後に、コーディネーターの三村浩史氏(京都大学名誉教授)が、「まちの資源を認識し、行動しようということに目覚めていく『心』。行動を進めていくためのシステムを支える『技』。それを表現する私たちあるもの『体』。この3つが一体化しながら進んでいくというのはまちづくりにおいても素晴らしいことだと思いました。京都のまちもそのような目でみると、単に経済価値では計れないような宝物がいっぱいあります。そのことを明らかにしていくことで、次の世代にも伝えられるし、地域の宝も増えていくと思います」とまとめられました。



最後に、上山理事長(右)から地域参加者の皆さんに、修了証が手渡されました。

平成11年度賛助会員(平成11年8月末現在。50音順。)

[個人]

秋山 智則	岡村 虎夫	佐竹 和男	土井 健資	福留 剛
粟津 六男	岡本 晋	塩見 和也	中川 慶子	藤本 春治
伊坂 善明	奥 美里	島崎 耕一	中島 吾郎	平家 直美
石原 一彦	奥山 脩二	清水 武彦	中野 代志男	星川 茂一
井手 正己	尾関 亘	杉山 義三	西川 久壽男	堀岡 博
糸井 恒夫	小野 幸一	高木 勝英	西川 壽磨	正木 敦士
稲石 勝之	小山 選一	高木 伸人	西田 祐司	松村 光洋
稲波 良幸	桂 豊	武居 桂	野島 久暉	南 寛
稲本 浩一	神谷 潔	武井 佐代里	野原 康	森田 知都子
大伏 真	川口 東嶺	竹井 隆人	橋本 清勇	山口 巖
井上 雅生	川島 三郎	竹林 哲	長谷川 忠夫	山口 翔
上田 修三	河内 隆	田中 治次	長谷川 輝夫	吉田 真由美
植村 博之	北里 敏明	田村 佳英	服部 俊幸	吉原 和恵
大谷 孝彦	絹川 雅則	寺田 恵子	林 建志	淀野 実
大橋 浩	木村 茂和	寺田 敏紀	平本 貴子	
大森 貴	木村 隆之	寺田 史子	平本 照子	
岡崎 篤行	阪本 隆哉	寺本 健三	深井 敦夫	

[団体]

アジア航測(株)京都支店	(株)ゼロ・コーポレーション	清水建設(株)京都営業所
大阪ガス(株)	(株)地域計画建築研究所	(社)日本建築家協会近畿支部京都中央
大阪ガス(株)京滋事業本部	(株)地域生活空間研究所	中央復建コンサルタンツ(株)
オムロン(株)	(株)西利	都市居住推進研究会
(株)オーセンティック	(株)日栄	日新建工(株)
(株)大林組京都営業所	(株)堀場製作所	西日本電信電話(株)京都支店
(株)木津工務店	関西電力(株)京都支店	花豊造園(株)
(株)京都科学	京セラ(株)	松下電器産業(株)公共システム
(株)京都放送(KBS京都)	京都駅ビル開発(株)	営業本部関西支店京都営業所
(株)建設技術研究所	京都ステーションセンター(株)	ローム(株)
(株)ジェイアール西日本伊勢丹	京都リサーチパーク(株)	

京のまちの今昔物語

中京区、四条室町界限。1970年代半ば頃。
右手後方に見えるのは、元京都市立明倫小学校。
小学校は姿をとどめているものの、今では、周囲にはビルが建ち並んでいます。
写真は当時のこの界限の懐かしい姿を思い出させます。



写真とコメントは写真家・松尾弘子さんからいただきました。

「京のまちの今昔物語」では皆さんがお持ちの昔の写真の切り口にして、現在の京都の問題点を再確認できたらと思います。
皆さんもお宅のアルバムの古い写真を探し出してぜひ投稿してください。

京町家まちづくり調査 集計結果まとめ！

多くの市民の皆さんのご協力を得て長期間にわたって行ってきました「京町家まちづくり調査」の集計結果がこの度まとめられました。

今回の調査は、戦前に建てられたと思われる木造建物を対象に行いましたが、これは結果として調査範囲内の全ての敷地数の内、何と半分以上を調査したことになります。この調査がいかに大規模なものであったかということが伺われます。

また同時に、その内の約85%の約27,000軒が京町家と思われる外観を持っており、京都都心部にはまだまだ多くの京町家が存在すること。そしてそのほとんどに人が住み、または事業を営んでおられ

ることが明らかになりました。これらが全体像として初めて明らかになったということも、大変意義のあることですが、何よりも、この調査に多くの市民の方々に参加いただけたことが、今後の京町家まちづくりに向けての大きな成果です。

紙面の都合上、ここではその集計結果の一部を紹介します。

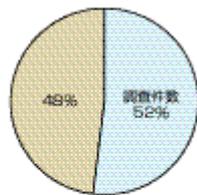
なお、この「京町家まちづくり調査集計結果」のさらに詳しい内容については、センターのホームページに掲載しています。

(<http://web.kyoto-inet.or.jp/org/kyoto-ws/>)

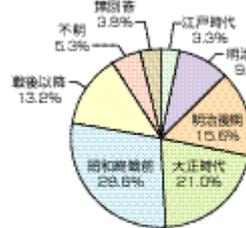
京町家まちづくり調査範囲



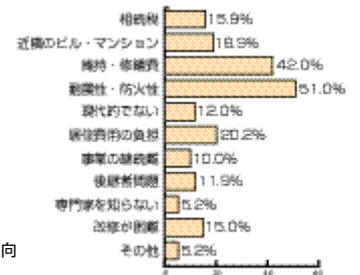
調査対象範囲内の全敷地数に占める調査件数



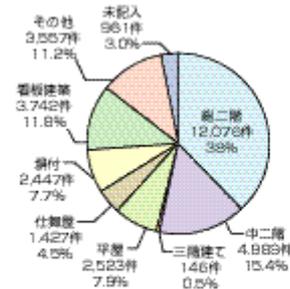
建築時期



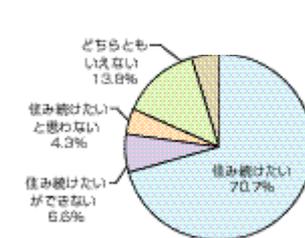
継続居住等の問題点(複数回答)



建物外観類型



居住継続意向



京町家の保全・再生事例

～暮らしからの発想～

「うなぎのおせき」(上京区千本上立売下ル)

千本通の西側を今出川から上立売へ向かうと、うなぎの蒲焼きの芳ばしい匂いが漂う。「商売しているのも暮らしの一部。私たちはここを、自分たちの住まいとして直しました」。自宅の表でうなぎ屋を営む尾関さんご夫妻はこう言う。ご主人は今年で40歳。昨年の6月から11月にかけて家を改修した。「今は町家を直すというと、商業施設で何かに活用されるイメージがありますが、それは一つの選択肢にしか過ぎません。今残っている町家の大多数で暮らしが営まれていることを考えると、住まいとして残っていかなければ町家はどんどんなくなってしまう。」



大正期につくられた2軒長屋。「古くて

ポロポロ、こんな家はどうにもならない」と、始めは新築を考えていた。たまたま京町家再生研究会の野間光輪子氏が講演するシンポジウムに参加し、話を持ちかけた。野間氏は快く相談に応じ、「潰すのはもったいない」とアドバイス。尾関夫妻は改修を決断する。

この町家は以前にも改修を重ね、台所部分を床上げし、火袋(通り庭)を塞いで部屋として使っていた。それを全部取り払うと、天窓から光が差し込み、表から奥まで涼やかな風が通り抜ける。火袋の脇には箱階段を置き、2階へアプローチできるようにした。畳の敷かれた客間からは陽光降り注ぐ明るい庭が眺められる。その奥には納屋を改修してつくった、台所やリビングなどの生活空間。表とは2階の渡り廊下でつながっている。子供がアトピーを持っているため、特に自然材を使うよう心掛けた。

京町家を原型に戻す。「これが京都の細長い家には一番いいのだろう」と思ったという。改修時には、壁をめくったらまた壁が出てくるなど、幾度の改修の跡が見られた。「潰されかけて、潰れなかった家。潰さんといってくれというメッセージを持った家なんやろな」。その痕跡を見つめながら、みんなで話した。



「西陣でも町家がどんどん潰れていっています。ここで前向きに何とかせんと、なんぼでも潰れていく。僕らの同年代、ローンを背負う世代にこの家を見てもらて、あ、こういうやり方があるんやな、こんなもええな、と言うてもらえたらありがたい」とご主人。「そういう意味でも、家を直したいと思っている人に見ていただきたいですね」と奥さんもうなずく。

暮らしを考えると京町家のカタチにいきていた。時代を越え受け継がれる京都の住まいと、その心に触れた気がした。

『まちづくり交流』

町家倶楽部

市民グループによる活動と地域が協働し、地域の活性化を展望した取組が行われています。今回は、西陣地域の資源としての京町家を活用し、新たな住人の入居をコーディネートする「町家倶楽部」を紹介します。

伝統産業・芸術の地である西陣の活性化を目指し、約4年前から西陣の町家に芸術家らを招き入れる活動を続けている「西陣活性化実顕地をつくる会(ネットワーク西陣)」という市民グループがあります。すでに町家に入居した芸術家らは30を超えており、そうした活動に賛同した地元の方々等と、西陣活性化実顕地をつくる会(ネットワーク西陣)のメンバーにより、今年7月、町家倶楽部が誕生しました。

町家倶楽部では、これまで手掛けてきた町家活用事例を、より多くの方に紹介するとともに、そのノウハウを活かし、京町家の活用希望者と空き町家所有者とをつなぐ「京町家の仲人」を行っています。

また、町家活用例としてのモデルルームを兼ねた「町家倶楽部ハウス」を開設し、パソコン等による町家活用事例の紹介や空き物件情報、その他西陣に関する情報の提供を行うと同時に、オープンスペースとしても貸し出しており、既に様々なイベントが行われています。

「倶楽部の立ち上げ以降、多くの人々が来られ



町家倶楽部ハウス

ていますが、皆さん自分の思うような物件がなくても喜んで帰られます。町家の貸し借りの情報って少ないから、そういう貸し借りの話を聞くだけでも収穫なんだと思います」とメンバーの小針さん。

メールや電話での問い合わせも多いそうですが、西陣まで足を運ばれる、熱心な人と話していると、「実はこんな町家が…」という話になることもあるとか。

「今は妙な町家ブームみたいなものがあり、きれいな情報ばかりが流れているから、いきな

り『町家に住みたい』って言われても、本当にそうなの？って思うことがありますね。そういう人を否定するつもりはないけれど、マンションの様に金を払えばそれで済ませ、というわけにはいかないし、住むためには手を入れたいといかないことも多いから。町家の貸し借りは、貸す人にとっても借りる人にとっても、ひとつの出来事なんです。それを楽しめるかどうかなと思います。大家さんの中には、『子供たちは出ていったし、隣に若い人がいると安心する』という方もおられます。そういうことは電話やメールでは伝えられないことが多い。ホームページを立ち上げてはいますが、本当はここ、この界限、西陣に来て欲しいんです」とメンバーの鏡さん。

「あとは近所のおじさん、おばさんがふらっと来てくれるようになったらいいですね」と、地域のコミュニティスペースとして、新旧の住民の交流の場となることも展望されています。

地域の資源を有効活用し、新しい力を取り入れ、その地域が活性化する拠点。また、伝統の中に生きる西陣において、新たな伝統を築いていく大きな力の一つとして、この町家倶楽部が展開されることを期待します。

お問い合わせ

町家倶楽部

上京区浄福寺通上立売上ル大黒町

E-mail : office@machiya.or.jp

URL : http://www.machiya.or.jp

まちづくり提案

京都醍醐 御霊ヶ下町・大構町 ~インターネットを活用し、町内会で情報発信~

地域まちづくりを進めていくには、地域への愛情と誇り、そして管理能力の向上と協力関係のネットワークづくりが必要とされます。特に管理能力の向上には、情報の共有方法、意思決定のプロセス、手法の確立といったことが重要ですが、これらにはそれぞれの地域での創意工夫が必要です。



ホームページのトップページ

今回は、地下鉄東西線開通により、新しいまちとして発展していくことが期待されている醍醐地域で、情報の共有手段として、インターネットを活用している伏見区醍醐御霊ヶ下町・大構町町内会長の佐治正雄さん、同広報部長の奈良磐雄さんにお話を伺いました。

ホームページには学区の行事や地蔵盆などの情報だけでなく、町内でのクラブ活動や町内のお宅の花壇、昔の風景、広くは醍醐の歴史や名所紹介など、生活に密着した情報が盛りだくさん。「平成9年4月に開設しましたが、思わぬ所からホームページを見たという感想をいただき、驚くこともあります。私たちはここに住んで良かったと思えるようなまちづくりを展開したいと考えていますし、ホームページはそのための1つの手段として、情報を提供しています。町費を使って維持管理していますので、町内の皆さんの理解と協力があって成り立っています。情報発信側としては、掲載内容には責任を持つ必要があると感じています」と佐治町内会長。

「電子広報誌的なホームページを町内の有志の協力を得ながら作っていますが、道で会ったらお互いが挨拶できる温かい関係を作り上げていくことを目的としています。また、町内がホームページで情報発信していることを、自慢に思う住民が少しずつ増えてきてい

るのも確かです。不特定多数の人に見られているという意識が、町内を良くしていきたいとい



佐治町内会長(左)と奈良広報部長(右)

う気持ちと行動につながっていけばいいなと思います。今後は町内の人同士の情報の媒体としてもっと活用して欲しいですね。また他の町内との連携も図りたいと思います。現在自宅インターネットを見ることができない人は、区役所などのコンピューター端末で見っていますが、もっと簡単に身近で見ることのできる場所が増えるといいですね。また双方向の情報交換ができればいいと思っています」と京都芸術短期大学でビジュアルデザインを教えている奈良広報部長。

電子メディアで発信されるわがまち情報は、事実を客観的に捉えることができ、まちへの愛情と誇りを一層醸成するのではないのでしょうか。更に電子広報誌としての情報共有のツールとして機能し、広くネットワークを形成していく契機となるものと期待されます。

ホームページアドレス

http://www.mediawars.ne.jp/ daigono1/

ニュービジネスの動向

このコーナーは、新しく立ち上がった、もしくは企画段階の新発想のビジネスの動向についてのインタビューによる紹介です。

日本電信電話株式会社

NTTコミュニケーション科学基礎研究所
(京都府精華町関西文化学術研究都市内)

社会情報研究部 / オープンラボ
協調システム研究グループ
主幹研究員 赤埴 淳一氏

ーデジタルシティ京都とは何ですか？

都市の様々な情報をインターネットで提供するコミュニティ活動支援のプラットフォーム(基盤)です。国内で初めて京都で取り組むことになりました。

試作版では、3次元仮想空間として四条通(烏丸通・八坂神社間)の約2kmを立体画像で再現し、マウスを使って実際に街を歩くことができ、気に入った建物があれば画面をクリックして、そのホームページに接続することができます。実際の写真を張り付けているため、現実味のある街並みを容易に再現することができます。

(デモンストレーションをさせていただいたところ、3Dのゲーム以上にリアルな画像で楽しいものでした。)

また、2次元地図には京都市の地図に買物、生活、食事、健康、娯楽など11分類にわたるホームページが所在地に応じて書き込まれており、情報の検索が楽しくできるようになっています。



デジタルシティ京都の画面イメージ

ーご苦労された点はありませんか？

3次元仮想空間を現実に近い状態とすればするほど、取り込んだ写真画像相互の調整を際限なくする必要があるので、どの程度までリアリティを追求するかの決断には困りました。

ーきっかけは？

次世代情報基盤に関する基盤技術の新しいコンセプトの創出と、デジタルシティの確立を目指し、3箇年事業として平成10年10月にスタートしました。外部の知恵を取り入れるオープンラボの形で石田亨・京都大学大学院情報学研究所教授をリサーチプロフェッサに迎えるとともに、NTTグループや京都大学の他に数多くの研究機関や企業が協力しており、スタンフォード大学の研究者やシリコンバレーの技術者も参加しています。

ー今後の展開は？

1年目の区切りとしてNTTでは、現状の課題及び今後の展開について議論をする国際シンポジウムを、京都市リサーチパークにおいて、9月16日から3日間で京都大学大学院情報学研究所社会情報学専攻と共同で開催する予定です。アムステルダム、ヘルシンキのデジタルシティ関係者や、MIT(マサチューセッツ工科大学)など米国の研究者による招待講演を計画しており、様々な課題についての議論を深める予定です。

リアルタイムなセンサ情報として京都市交通局の協力により、市バスの運行情報やITS*、GIS*を活用した各種の情報を統合できるプラットフォームの実現も目指しています。

当面、コミュニティネットワークの情報の拡大のため、各種の団体や企業との連携を考えています。

ービジネスとしての展開は？

今回のプロジェクトは直接的な商品開発が目的ではなく、次世代の社会情報基盤のあり方を研究するのが目的となっています。もちろん、ビジネス化していける部分は切り出していくつもりです。



情報はあがるが、一部にしか流通していないことが現状における問題点だと思われます。将来的には社会情報基盤の整備により、市民生活の道具としてインターネットが浸透し、情報が活発にやりとりされれば、回線を提供しているNTTとしても望ましい方向となります。

デジタルシティ京都
<http://www.digitalcity.gr.jp/kyoto/index-j.html>

*ITS(Intelligent Transport Systems)
最先端の情報通信技術などを用いて、人と道路と車体を一体とした新しい高度道路交通システム。

*GIS(Geographical Information Systems)
人口密度や土地利用、気象条件、地質などの地図に関する多岐にわたる情報をコンピューターにより解析する地理情報システム。

《センター解説アワー》

「教育とまちづくり」

都市型・成熟化社会を迎え、現代の子供を取り巻く社会環境は大きく変化しています。外で遊ぶことが少なくなり、地域の大人とも話す機会が減り、生き物とのふれあいや自然の中で遊ぶ方法を知らないなど、子供と地域社会との関係はますます希薄化しています。そこで今、学校、家庭、地域の連携により、子供たちが地域とふれあい、その中で豊かな創造性を身に付けられるよう、地域を舞台に様々な教育等が行われ、大人も含めた広い意味でのまちづくりへの展開が期待されています。

2002年「総合的な学習の時間」創設に向けて

昨年12月に新学習指導要領が示され、2002年4月から完全実施される学校週5日制のもと、ゆとりの中で子供たちに、「生きる力」を育成することを目指し、新たに「総合的な学習の時間」が設けられます。この「総合的な学習の時間」は子供たちが、地域の中で自ら考え、課題を発見し、問題解決を図る能力を培うことを目的に、理科や国語といった教科の枠を越えた横断的、総合的なプログラムを行うもので、小学校では3年生以上の学年で週3時間、中学校では全学年で週2～3時間導入されます。

総合学習の本格導入を前に、現在京都市の全市立

小学校では、全国に先駆けて、年間15時間以上の先導的実践活動が試行されているほか、小・中学校計30校を調査研究校に指定し、その研究成果を全市に広める取組が行われています。また、昨年度から、小学校19校、中学校1校を「地域教育推進協力校」に指定し、野菜づくりや伝統産業、環境など地域固有の人材や資源をテーマに取り上げた授業を行うなど、総合学習につなげる基盤づくりが進んでいます。

さらに京都市では、「子供たちのため今大人として何をすべきか」を広く市民レベルで考え、行動し、情報発信する場として「人づくり21世紀委員会」を発足させ、77団体という各界各層の幅広い市民参加のもと各種取組が進められています。

子供たちの創造性をまちづくりに生かす

子供たちの持つ豊かな感性や創造力は大人たちを刺激します。実際のまちづくりにこうした子供たちの視点を反映させる手法が全国の地方公共団体や教育現場などで展開されています。

一方、海外では子供のまちづくり教育のためのプログラムが積極的に取り入れられており、なかでも、今月3日に当センターで開催した景観・まちづくりシンポジウム(ニュースレター前号で紹介)で講演いただいたカリフォルニア州立工科大学のドーリ

ン・ネルソン教授による「まちづくり教育」(City Building Education)は、過去の情報を積み重ねることによって最終的に創造性を身につける伝統的な教育方法に対し、始めに創造・学習を行ない、問題解決のプロセスで多くの情報を身に付ける「逆方向の思考」により子供が創造していくことを学ぶ体験学習を取り入れ、それらを「まち」に応用させています。

また、日本の学校教育でも取り入れられているパソコンは、子供たちのイメージや創造性を膨らませ、それらをより豊かに表現できる方法を身に付けさせることも目的としています。

子供たちが実際にまちに出て、地域の人とふれあい、地域を知ることによって、まちの資源や空間に目を向け、それらをもっと大事にしていこうという意識が育まれます。さらに、地域の一員としてそれぞれが自分の存在を見付けることで、将来的に地域の活性化が期待できます。そして大人たちにとっては、子供たちの豊かな創造力を生かし、同じ目線でパートナーとして共に地域を理解し、まちづくりを進めていく姿勢が今後ますます求められるのではないのでしょうか。

私と京都



地蔵盆にみる京都のまち

都市やその周辺の住民の大半は「よそ者」である。私も子供時代にいろんな都市に住み、京都に学生としてやってきた。当時は高度成長期の真只中であり、都市が大きく変貌していた時であった。しかし、そんな時代にも、京都は既に千年も都市として洗練され、不変の芯をもったまちに見えたものである。それだけに、京都はよそ者には住みにくいところだと言われてきた。

およそ20年前、その最たる中京に住むようになって、確かに、家族のような近親感はないが、歴史のなせるところか個人が自立心が高く、互いに近づき過ぎず、しかし疎遠にもならず、地域の意識を共有していることに気付いた。これこそ、今に通じる都市生活の極意なのではないか。

例えば、お地藏様は小さな町内の一大行事である。わが町内では、早朝から町内総出で飾り付けを行うことになっている。手慣れた男性たちが組み立てていくが、年に一度のことが身につけているのは年季の故であろう。飾り棚や子供たちの名前が書かれた提灯などとともに、町内の古い図面や住民の名前を墨書した分厚い和紙の文書も降ろされて、虫干しよろしく風に通

(財)京都市景観・まちづくりセンター評議員
浅岡 美恵
環境市民共同代表、弁護士

される。驚いたことに、それは江戸期のものだが、まちの区割りは殆ど今日そのままである。

通りに向い合った数十軒だけの小さな町内に、この日のための道具一式を納める部屋がずっと確保されてきた。こうした営みがそここにあって、京都のまちを魅力あるものにしてきたのであろう。

しかし、この伝統行事も風前の灯である。周辺では若い世代が郊外に出て子供が少なくなり、老後問題や相続問題を契機にマンション化が進んでいる。地蔵盆の行事がなくなれば、「町内」の意味も変わるだろう。その後子供が増えても、一旦途絶えた地蔵盆の文化を復活させることは難しい。

かつてよそ者に動じることがなかった京都にも、内外からの変貌の波が押し寄せている。建物の建替え時期を迎えていることも変化を加速している。時代とともに住み方が変化するのは当然だが、問題はその姿である。地域の人々の営みや、そこでもたらされるきずなこそが、子供がこどもらしく住める、節度ある良質のまちを築くもとである。そこに、よそ者もその一員であることは言うまでもない。

センター語録

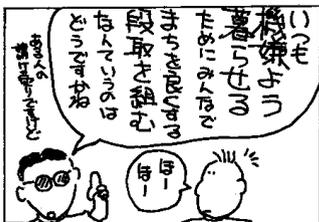
地域まちづくりの契機となることを目的に、昨年度から始まった地域まちづくりセミナー。初めての試みとして上京区の地域住民の方を対象に行いましたが、参加していただいた方々のご理解、ご協力のお陰で、無事終了することができました。そしてこのセミナーで得られた成果を「いきいき定住物語」という冊子にまとめることができました。本当にありがとうございました。

この4回のセミナーを通じて、住民の方々のまちへの熱い思いと、まちづくりにおける人と人とのつながりの大切さを改めて感じました。

また、ロールプレイングという手法を活用し、まちの様々な立場の人の役柄を演じながら、地域課題について考えていきましたが、皆さんの役者ぶりには、大変驚きました。このように、まちには様々な人が様々な立場で住んでいます。歴史的、文化的資源だけでなく多くの人々やその人々のまちへの思いも、まちにとっては大きな財産。それらを生かしたまちづくりのお手伝いに、今後も努力していきたいと考えています。ご支援、ご協力をよろしくお願いします。

(景観・まちづくりセンター事務局 M.Y.)

ぱとほま湿布 vol.10



センターからのお知らせ

賛助会員の募集 (平成11年度分)

京都のまちづくりに貢献したい！センターの活動を応援したい！そんなあなたの熱意をお待ちしています。

- [特典] ・ニュースレター(年4回・季刊)の送付
- ・ニュースレターでの活動紹介
- ・シンポジウム、セミナー等への優待

[年度会費]

個人1口:5千円 団体1口:5万円

まちづくりフレンズの募集

地域のまちづくり活動において、各種イベントや啓発・学習活動にボランティア・スタッフとして参加していただける方を募集・登録しています。

京まち工房 ホームページ

<http://web.kyoto-inet.or.jp/org/kyoto-ws/>



センターの取組内容をはじめ、まちづくりに関する様々な情報を発信するホームページ。皆さんからのまちづくり情報もお待ちしています。

(財)京都市景観・まちづくりセンター「京まち工房」案内



〒604-0846 京都市中京区両替町通押小路下の金吹町452 (元龍池小学校内1階南側)

TEL 075-212-4031
(支援・参加・人づくり)

FAX 075-212-4047
e-mail: kyoto-ws@mbox.kyoto-inet.or.jp

相談の受付等

月～金(祝日を除く)9:00～17:00

来所される場合はなるべく事前にお電話ください。なお、駐車場はありませんので地下鉄をご利用ください。